
2人で1人の勇者様

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2人で1人の勇者様

【Nコード】

N7364Y

【作者名】

ハル

【あらすじ】

桜庭優と紅葉穹は両親がおらず、2人ぐらし。そんな2人が家を出たら異世界に召喚されて勇者になっていた。1人は精霊魔術師、もう1人は大魔術師となり2人で1人の勇者となる。名前だけ勇者は魔術学校に通い、そこと日常での、ほのぼのバトル展開をお楽しみに。最後に説明下手ですいません。

召喚（前書き）

まずはじめに、こんな小説を読んできていただき、ありがとうございます。

召喚

入学式に行こうと家を出た、桜庭優さくらば ゆうだ。そして今、親友の紅葉穹あかは そらは家から出た瞬間に、目の前が真っ暗になり、目の前に変なオッサンがいた……。

「なあ穹、俺達って……入学式に行く途中だったよな？」

「そうだね。僕達は普通に家を出たら、ここにいたと思うよ」

そう2人はいつも通りに一緒に家に出て、今日から始まる高校の入学式に参加しようとしていたのだ。

それが、何故こうなったのかは2人に全く心当たりが無かった。

「君達が異世界から来た者達か？」

2人にとっては、目の前のオッサンが話してる意味など言葉は分かっても、全く理解していないだろう。

「あなたが言っていることが全く理解できないのですが」

穹の言葉にオッサンが少し考える。

「お父様、いきなり召喚されたのです。状況が飲み込めてないと思います……」

「おおそうだった。いきなりここに召喚したんだ。混乱するのも無理はない」

オッサンの隣には、いかにも王女様と思われる美少女が座っていた。その容姿は長い銀髪に翡翠色の目、それにその思わず見惚れてしま

うほどに整った顔が印象的だった。

と言うことは、オッサンはもしかしたら国王様なのかもしれない。

「ここが日本でないなら、僕達が異世界から来た者だと思います」

こういう時の穹は冷静に物事を考えられる。

それとは逆なのが、その隣にいる優だ。

「なら、君達が異世界から来た者だ。ここはスビル王国。君達の日本と言う国は聞いたことがない」

「話は変わりますが、僕達はどうして異世界に召喚されたのですか？」

穹はあまり感情を顔に出さない場合が多い。そして、今も顔に出さずに冷静を装っている。そんな穹の心情が分かるのは、生まれてからの、ほとんどの月日を過ごした優だけだ。

「うむ、それも話さなくてはならないな」

「つまり、君達は勇者として召喚されたんだ」

「はい？」

優と穹は声を揃えて答える。これも、過ごした月日が成せる事だろう。

「勇者と言うのはな、戦争にならないための抑止力としての役割がある。勇者として異世界の者を召喚するのはこの国だけだが、どの国でも勇者は最強の名を有する」

2人は言葉に詰まる。脳の処理能力の方が追いつかないのだ。

「つまり、俺達は戦争の時には戦うけど、それ以外ではただの勇者って称号持つてるだけってことですか？」

「そついう風に捉えてもらってもよい」

「でも勇者が2人つてのはどうしてなんですか？勇者って普通は1人だと思つのですが」

そう、普通は勇者は1人。漫画やゲームの世界では勇者は1人しかないだろう。

「君達2人で勇者だからだ」

王様の答えは2人で1人の勇者らしい。

2人で1人と言つのは、中学卒業と同時に2人だけで生きてきた2人にとってピッタリな言葉だ。

「それで、勇者を引き受けてくれるか？」

この質問に対する答えは決まっている。断つても元の世界には帰れないだろうし、無理矢理にでも勇者にするだろう。

「いいぜ！」「分かりました」

返事に2人の性格が現れてるが、これが2人なのだ。

それに、2人とも勇者と言つのは満更でもない。

活発的な優はともかく、それとは対照的な穹までもが…。

「では、勇者の腕輪を」

どこからか魔術師のような格好の男が来ていて、手に持った盆の上の腕輪を差し出してくる。

「それは、その国の勇者にしか着けられない。それも勇者の人数分だけ用意されるらしい。今までは1人しかいなかったが、今回は2人で1人だからな」

王様が笑いかける。それを無視して2人は腕輪を手取る。

触れた瞬間に激しく光り、いつの間にか優と穹の手首には腕輪が着いていた。

「その勇者の腕輪は所有者の望む形状に変化し、その能力を発揮できる。あとは、腕輪が教えてくれるとしか、書いていない」

王様は先代の勇者が書き記した本に書いていたことを述べる。

「それでは2人には魔術学校に入り魔術を学んでもらう。それまでに初級魔術を娘のフェルミに習いなさい」

王女のフェルミがこちらに一礼してから近づいてくる。

「あ、あの、よろしくお願いします」

優の手を握って挨拶する彼女の表情を見れば、今の彼女の心情が手に取るように分かるだろう。

「優、いきなりフラグ立てるところは流石だよ」

優も穹もかなりのイケメンだ。2人とも自覚はしていないが、お互いがモテることは理解している。

「えっ、フラグなんて立ってないだろ？」

自覚なしの優にとっては、いつも通りの反応だし、この光景も特別珍しいというわけでもない。

「それでは、今日はゆっくり休んでください。明日から、この国の地理や歴史、魔術と簡単に教えるので」

「はい」「分かりました」

優は気のぬけた返事で、穹は事務的に返事をする。

召喚（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

特にお気に入りと評価お願いします。

契約

異世界に召喚された日は、フェルミが2人を城の中を案内した。そして2人はと言えば、城で出た見たこともない料理、フカフカすぎるベッドを堪能したのだった。

「優さん、穹さん、早く起きて下さい」

フェルミが直々に2人を起こしに来る。本来の客人は起こしに行かないし、王女が行ったりなどするはずがない。

つまり、異世界から来た人物、あるいは勇者とはそれほどの存在だと言っただ。

ただ、今回の場合は少し意味が違う。

「早く起きて魔術の練習をしないと、入学式までに初級魔術もできませんよ?」

そう、一週間後は魔術学校の入学式で、初級魔術から始めるが、それぐらいは出来て当たり前なのだ。

「…………おはよう」

穹が先に起きる。

だが、その隣のベッドで寝ている優は一向に起きる気配がない。

「……」

「いつてえ！穹、何すんだよ？」

穹が布団をめくって、太ももを思いつきり抓ったのだ。それは尋常じゃない痛さだっただろう。

「優が起きなかったからね。ちょっとしたスキンシップだよ」

「限度つてもんがあんだろ！」

「起きない人が悪いんです」

穹は意外と子供っぽい一面もある。今回がいい例だろう。

「あのお、食事が終わったら、魔術の練習をしたいのですが……」

「りょーかい！」「分かりました」

恐る恐ると語り掛けるフェルミに、2人はそれぞれの返事を返した。

朝食を取りながら、フェルミが予定を話し終わる。

「じゃあ、朝と昼は魔術で、夜は歴史と地理を日にちごと。ってことよろしいですか？」

「はい、それで間違いありません」

穹が事務的に質問し、それに、フェルミも答える。

穹は基本的に馴れない相手には、敬語や余所余所しい態度を取って

しまうのだ。

「魔術ってどんなのをやるんだ？」

「まだ説明してなかったですね」

魔術には、いくつか種類がある。

魔法、精霊術、この2つを纏めて魔術と呼ぶ。

魔法は自らの魔力を使い、不可能を可能にする力。

例えば、何も無い場所から火を生み出すことも、不可能なことを可能にしたという捉え方もできる。

次に精霊術は、自らの魔力を使い、精霊を召喚する力。

例えば、火の精霊を召喚し、その力を剣に纏わせたりできる。他にも精霊を使って魔法紛いのこともできる。上位の精霊になると、その精霊の属性の魔法を打ち消すこともできる。

魔法は発動が早いのと、応用が効く。

精霊術は威力が大きく、上位精霊にもなると天災のようなことも起こせる。

お互いに利点があるので、どちらの方が優秀と言っわけでもないので、今の時代まで生き残っているのだ。

「と言っわけです。何か質問はありますか？」

一通りに魔術のことを説明したフェルミに、優が手を挙げる。

「はい、ユウさん」

フェルミの顔が少し赤い。やはり一目惚れをしていたらしい。

「魔法と精霊術は分かったが、両方使えたりするのか？」

「基本はどちらかしか使えません。ですが、歴代の異世界から来た勇者の方々は、両方使えたりらしいですよ」

「じゃあ、俺達も両方使えるのか？」

「それは、そうなんではないでしょうか。ちなみに私は魔法の方を使います。それと、精霊術師は数がそんなに多くないので、魔法使いの方が多いいんです」

ここで穹が手を挙げる。

「あの、精霊って……契約とかいるの？」

「契約は必要ないはずですよ。呼べるか呼べないかですしね。あつ、精霊王と最上位の精霊は契約が必要らしいですよ」

「なら、僕は使えると思います、精霊術」

「どうゆうことか説明して頂いても？」

さっきは両方使えるかとは言ったが、両方使える人間を見たことがないので、少し信じきれない部分があるらしい。

優が言っていたら、信じてたかもしれないが……。

「昨日の夜に夢を見たんです」

「内容を話してもらっても？」

穹は小さく頷く。

『小僧、力を求めるか？』

真っ白な空間にいる穹は、目の前にいる女の子から質問を受けた。

女の子は、見た目的には同じ年くらいだが、その内側に大きな何かを感じる。それが精霊王の魔力なのだが、穹には未だに正体が分からない。

『小僧、力を求めるか？』

「同じ年くらいなのに、小僧はやめてもらえますか？」

同学年の女の子に小僧と呼ばれて、いい心地はしないだろう。

だが、白くて長い髪に、赤い目、そして整った輪郭の彼女には、その言葉が可笑しかったのか小さく笑みを浮かべる。

『小僧、精霊王である私に、そんなことを言ってきたのは小僧が初めてだ』

「そりゃどうも」

『小僧は、力を望んでここに来たのだろうか?』

「貰えるものなら、貰っていきますよ」

『何のために力を望む?』

穹は少し考える。

「今の僕にとって大切なものは、親友で家族の優だけです。ですが、これから大切なものが増えても、僕が守れるぐらいの力は欲しいかな」

『つまり、他人を護るために力が欲しいのか?』

「そういうことです」

『おもしろい。ならば、私が小僧と契約してやる?』

「けっこうです」

予想外の答えに精霊王が固まる。

『では、力がいらぬのか?』

「それはいいります」

『だから、精霊王の私が力になってやる?……』

「分かりました。で、僕はどうすればいいんですが?」

『私と契約するから、手を出してくれ』

「はい」

『精霊王オーベロンは、此の者を契約者と認める』

簡単に言うと、精霊王オーベロンの体が光り、その光りが穹の右手の中指に集まり、その場所に指輪ができる。

「これって、どうなってるんですか?」

『私と契約したから、指輪になって、小僧と行動を共にするだけだぞ。必要なだけの魔力を流してくれると、実体化して戦うこともできる』

「うーん、とりあえずは分かりました」

「と、まあ、そんなことがありました」

「それって凄いことですよ?精霊王の契約者なんて、100年以上出てきてません」

「あっ、やっぱり夢じゃなかったんですね」

「くそう、俺が精霊王狙ってたのに」

優が本気で悔しそうにする。

「僕の勝ちだね、優」

「大丈夫ですよ、ユウさん。精霊で負けても、まだ魔法があります」

「…そうだな。魔法で穹より凄いの使えばいいのか」

「はい」

すぐに立ち直った優に、すぐさまフェルミは返事をする。

契約（後書き）

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

特にお気に入りと評価お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7364y/>

2人で1人の勇者様

2011年11月22日02時00分発行